

野戦攻城の精神 -橋川文三の思想形成-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部・文学研究科 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飛矢崎, 貴規 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20213

野戦攻城の精神

—橋川文三の思想形成—

飛矢崎 貴規

要旨

本稿では橋川文三の思想形成について、雑誌『辺境』に掲載された日記を分析することから迫った。この日記は、橋川が編集者として働いていた時期である一九四九年から五一年の期間に書かれたものを、旧知の友人であった井上光晴が公開したものである。

本稿では、交友関係と読書傾向を概観したうえで、この時期の橋川が何に問題関心を寄せながら思索を重ねていたかを明らかにした。橋川は戦争の影響を引きずりながらマルクス主義関連の文献を読んでいた。その歩みを、みずから「野戦の状態」として意識していた。そのとき橋川をとらえたのは、客観性や普遍性における「意志」の問題であった。客観性や必然性を強調すればするほど、個人の意志は不要になってしまいが、それでよいか。

この問題について丸山眞男との対話などを契機としつつ、自分の性急な性格を見つめ考察をふかめていった。「全体と個」や「宿命論」について考えるなかで、プラグマティズムに関心を向け、エンピリシズムを評価していく。やがて橋川は自分が対

象をどのように「認識」するかということこそ「意志」の意味があるという考えにいたる。(「認識としての意志」という考え方である。)

こうした過程には、橋川がその後の著作活動においても貫いた態度を見いだすことができる。とりわけ「美」への関心、「私」をふくむ普遍性の探求、そして「悪」や「人間の問題性」といった領域への関心には、その後の著作活動を考えるうえでも重要な諸特徴である。

キーワード…意志、個性、歴史

はじめに

橋川文三の代表的著作である『日本浪漫派批判序説』（未來社、一九六〇年）には、戦中にみずからが「いかれた」保田與重郎や小林秀雄への分析が、カール・シュミット『政治的ロマン主義』を手がかりに重ねられている。一九五七年から連載がはじめられ一九六〇年二月に単行本として刊行されたことから理解できるように、この著作を準備した精神的格闘は、占領期においてなされた。

しかし、この期間における橋川は編集者として働いたこともあり、みずからの著作を残していない。ただ日記が残されている。旧知の友人であった井上光晴が編集していた『辺境』一九四九年七月号に「橋川文三日記一九四九・一九五一」として掲載された。編集部の注記には「橋川文三氏が生前書き残した一九四九年一月一日（雑誌「潮流」編集部在職中・二八歳）から一九五一年九月二八日（結核のため、東京・中野療養所に入所当日）までの日記の抄出である」と史料の性格が記されている。著作ではないものの、橋川が占領下の日本社会をどう生きていたかを知る手がかりになる。その記述の内容からは思想形成の過程をも知ることができる。

井上光晴は「橋川日記」についてこう述べている。「橋川の片時もやまない旺盛な読書力と、詩人らしい感性に満ちた『生』への探求力には、今更のごとく驚嘆させられる。いわば、橋川にやがて訪れる著作活動への確かな『助走』が、あるいは『序奏』がこの『日記』から感じ取れるのだ」¹。この空白期間には日本浪漫派からの離脱、敗戦、左翼思想への傾斜、入院などを経験している。つまり、この時期は橋川にとって自己意識の解体と再編の期間だったといえる。この期間について、本稿では「日記」を素材として橋川の読書傾向や交友関係を参照しつつ、どのような問題に直面し、その克服のためにいかなる思索を重

ねたか、その歩みをたどり敗戦後の思想形成を素描したい。そのさい橋川の思想形成の過程を同時代情況のなかで考えつつも、『日本浪漫派批判序説』など、その後に著作として展開された内容も念頭におきつつ、たどっていくことにしたい。

一 読書傾向と交友関係

この日記が書かれたころ、橋川は潮流社、弘文堂で編集者として勤務していた。そのため文学、芸術から社会科学系の人物まで幅広い交流があった。仕事上の記録のため、どこまで深い交流があったか定かではない部分もおおいが、眼にとまる名をあげると、以下のとおりである。瓜生忠夫、丸山眞男、中野重治、金達寿、中村哲、高見順、杉浦明平、内田義彦、今井清一、神島二郎、久野収、脇圭平、藤原彰、大塚久雄、遠山茂樹、下村寅太郎、大河内一男、塩田庄兵衛、宇野弘藏、武田清子、鶴見和子、鶴見俊輔、福島新吾、加藤周一、蠟山政道、川島武宜、長谷川如是閑、塙作樂、猪野謙二らである。とりわけ丸山についての記述はおおく、私的な交流もつづいていた。

日記からうかがえるこの時期の読書傾向では、マルクス主義関係の文献がめだつことが注目される。いくつか拾いだすと、レーニン『共産主義における「左翼」小児病』、レーニン『国家と革命』、マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』、マルクス『ゴータ綱領批判』、マルクス・エンゲルス『資本論』、レーニン『唯物論と経験批判論』といった書目がならぶ。鶴見俊輔はこの時期の橋川の印象を回想してこう書いている。「戦後まもなく橋川さんに会った。私に会いに来たのではなく、姉のところにも原稿をたのみに来たところ、会った。／＼そのころ彼は『潮流』の編集者で、マルクス主義者だった。しかし、あの時代のマルクス主義者がありがちな、天下のことを自分は皆知っているというおしつけがまじしさを感ぜなかつた」²。ここで鶴

見が述べているように、橋川はかなりマルクス主義関連の著作を読んでおり、実際に「マルクス主義者だった」と考えられる。ただ、「おしつけがましきを感じなかった」と鶴見が述べたように、橋川はマルクス主義に浸りきっていたわけではなかった。むしろマルクス主義の妥当性を認めつつも、そのうえで残る違和感をかかえつづけていた。以下では橋川がマルクス主義のどこに違和感を感じていたかをたどりながら、著作活動以前における思想形成の過程を見てみたい。

二 意志とは何か

一九四九年一月七日の記述では、「エティカと『純粹理性批判』をよんでみたい。そして、意志の自律の問題をとおして、近代的倫理の構造を研究してみたい」との頃思っている」と書いている。橋川は「意志の自律の問題をとおして近代的倫理の構造」に関心を向け、スピノザ『エチカ』やカント『純粹理性批判』を読もうとしている。このとき橋川の問題関心は「意志」にある。

橋川日記に顕著なのは、この「意志と何か」という問いが、みずからの性格についての分析的な記述と交叉させながら記されていることである。一月一三日にはこう書いている。「僕の人生、幸福、快、不快に対する性急さということ。すぐにガリガリと丸かじりしなければ気がすまぬ。悠容として人生の滋味を味わうというような洗練(?)が欠けているということ。……僕の中には、まだあの孔子の戒めた「速やかに成らんことを欲する」要素が沢山のこつている」⁴。橋川は「性急さ」が自分の性格に影をおとしていることに眼を向けることによって、過剰なめり込みとでもいうような自分の性格を批判的に見つめている。

この関心は行動や判断をいかにくださかという問いとして記

述されもする。二月四日の記述ではこう書いている。「常に前をみて進むこと——それは立派だ。しかし非理的である。常に後ろをみて進むこと——未練がましい。そして行動にならぬ。／理性的であること——時間(人間変化の形口論)の正しい把握の下に満(?)眼に自分の行進をみきわめていること」⁵。「常に前をみて進む」だけでもなく、「常に後ろをみて進む」でもない行動のあり方を考えていた。このとき橋川は戦争体験からどのように進むかを模索していた。

それは「戦争」の反省としての「革命」活動という方向性に向かう疑問でもあった。二月八日にこう書いている。

時代が戦争を必然的に生み出すとすれば、革命は反戦争の闘争組織を必要とする。かつて帝国主義侵略戦争の中で消耗せられたわれわれの生命が、再編成される場所が再び闘争の結成でなければならぬのか?

昨日丸山さんが久野収から聞いた話だといって話していた。「きけわだつみの声」をよんで京都ではKP入党者が沢山あったという。「そんなにまで苦しまなければならなかったのか」というのがその判断の動機であったそうだった。人民戦線論は、すでに若い人々には受け入れられないとい

って嘆いていたそうだった。
橋川の違和感の所在は、時代の必然性に身をあずけるだけではないかということと、その結末が「再び闘争の結成」でなければならぬかという疑問だったと推測できる。橋川が戦没学生への共感から共産党に入党していく状況、つまり思想としての人民戦線が機能していない状況を丸山から伝え聞いたことを書きとめたのは、同世代の動向を気にしていることであろう。翌日、橋川は早くも『きけわだつみの声』を読了し、その感想を記している。

昨夜と今朝「わだつみ」読了。
常に生は深い。それは生の思いうるいかなる限界よりも深

い。その底に「死」があり、「死」の底に歴史があるわれわれ自身が深い。それはつねに忘れられている。悔恨のように郷愁のように、それはいかなる人間感情よりもつよく深くひろく人間の心をつかむ。われわれは死者によつて生きる。われわれは人類のかおを見守りながら生きる。……
 本当の「愛」は生と死——今と歴史の結合の中から生れる。
 夜の春雷よ、遠くへかえれ。
 友を拉して遠くへかえれ。

戦わなかつた生者は不幸である。

僕の中にある野戦の状態！

僕はひとりで食物を漁り、ひとりで身のまわりを始末し、唯一本の剣をさげて野に在る。僕には帰るべき城もない。

（それはあるのだ！とおく歴史と愛の雪煙の彼方に、ついに僕の生の終るところに！）僕は汚れきつつき、粗暴となり……しかも無限にやさしい感情を口めながらコドクな野戦を戦っている。

* * *

僕にとつて共産主義は、なお余りにつよすぎる思想である。それは完べきな機関の組織であり、人は戦場にあることをつねに忘れることはできない。

橋川は同世代の動向を確認しながら、みずからの心情を詩的に表現している。「戦わなかつた生者は不幸である。僕の中にある野戦の状態！」。橋川にとつて戦後の過程は、戦中に自分が戦わなかつた負債をおう過程として自覚されていた。その負債ゆえに「僕には帰るべき城もない。（それはあるのだ！とおく歴史と愛の雪煙の彼方に、ついに僕の生の終るところに！）」のである。それでも橋川が「僕にとつて共産主義は、なお余りにつよすぎる思想である」と述べたのは、その客観化された組織性に自分という存在が入りこむ余地を見つけれなかったからだった。

た。共産主義思想に賭けようとしても、我にかえつて問いなおす瞬間がどうしても生じてしまう。橋川の疑問は、普遍性や客観性における「私」の位置だった。
 この問題について橋川は一月一日に多くのメモを書いている。

錐のような神経の先端に一切の問題がのりかかる。面積が0に近い場合、その圧力は∞に近づく。

* * *

高見順との対談の話。

高見氏が、自分の一生のあやまりは、人間Ⅱ生を一つのプロセスとして（一つの目的への）のみみることをやったことである。（転向者の問題）今後「若いマルキストには、その点のあやまちを犯さないように生きてほしい」ということ。感動した。（正に僕の場合）

* * *

丸山さんがいつていた。シュヴァイツァーが「現代はヘーゲルとゲーテ的思想の相克の時代である」とかいている。うだが、これは深い観察である。「歴史と自己」といつてもいいし、全体と個といつてもいい、ヘーゲル——マルクス——レーニンの線、スピノザー——ゲーテ——の線。

* * *

この問題はすでに気づいている。生への畏敬と生をのみつくす献身Ⅱ自己放棄の情熱とのバランスの問題、その時僕はマルキシズムには道徳論が欠けていると考えた。これは当たつてなくないだろう。

* * *

道徳とはつねに現世的であり、個的なものである。抽象よりも具体、一般よりも特殊を指向するものである。それは科学（抽象的原理）ではすくなくともない。だからといつ

て芸術のように個物に没入するものでもない。一般と特殊の媒介者となるのがモラルである。それは正しく人間的なものである。真理や美は、非人間的、或は超人間的なものでありうるのか。

* *

マルキシズムは日本において啓蒙主義の役割しかもたなかつたという悲劇！ それはむしろ自然主義（ルソー）の役割を果たしたのではないか。（↓天皇制の圧力と歪曲）。

断章的な、あるいは箴言的な文章がつらなっており、一見すると脈絡がないかを感じられるが、これまでたどってきた文脈においたとき、その関心の所在はわりと明確である。それは「歴史と自己」、あるいは「全体と個」という問題である。

この観点から「錐のような神経の先端に一切の問題がのりかかる。面積が0に近い場合、その圧力は ∞ に近づく」というフレーズを読めば、全体と個におけるエネルギーの運動についての考察と理解できる。ある結節点の範囲が小さければ小さいほど、そこに全体の圧力が集約され無限に近づいていく。この論理の現実社会における例として、橋川は高見の話を書きとめたと理解できる。「人間Ⅱ生を一つのプロセスとして（一つの目的への）のみみる」ような人生観においては、「生への畏敬と生をのみつくす献身Ⅱ自己放棄の情熱とのバランスの問題」が消滅している。橋川はこうした態度が「道徳論」の欠如だと考え、「道徳とはつねに現世的であり、個的なものである」、「一般と特殊の媒介者となるのがモラルである」と考えた。「私」の問題を普遍性や、ある目的への過程に解消してはならない。こうした観点に立脚するとき、日本においては「マルキシズム」が「啓蒙主義」や「自然主義」としてしか受容されなかった問題が橋川に見えてきたのだ。

橋川はこの線を確かめるべく読書を重ねている。一二月五日の記述にはこうある。

フオイエルバッハ論よむ。ねながら、革命と人間完成というテーマを考える。それは一致せねばならぬと思う。組織することが、人間としてのゆたかな美しさと重なり合ってゆくこと——それは不可能にもみえる。しかし堀田「清美——引用者註」は結局それを云っているのだ。あるもののために組織するのではなく（その時人間性はプロセスとなる）現実には革命が組織されることが人間の成長であるというハアク——現実には人間を衝動する力は、そこから生れるのではないか。

* *

革命と組織の中で日々美しくなつてゆく人達——そういう人が周辺に革命をつくりあげてゆく。それは人間と歴史の必然のコースの微妙な複雑さから理由づけられる。昨日中村秀一郎がいつていたように、歴史の必然とは Selection の必然ということになるのだ。

* *

しかしそれは問題がある。たとえばデカダンスやニヒリズムは正しく末期現象であるからこそ存在するので、これを頭の中で拒否することは無意味であるという必然が貫徹するということとは反革命の可能性をつねに含むことになる。一種の偶然論のようにもきこえる。日本資本主義の怖さという場合、それを強調すればどうなるか？ それなら革命はどこから生れるか。それをしも必然にというならば、それは宿命論とどうちがうのか？ 一種の客観主義のように思える。だから問答無用で正に革命があること自体が真の解答だといえ、それはタカクラ張りの禅問答のようにもきこえる。

ここで橋川は「革命と人間完成」について考え、「Selection の必然」から「宿命論」や「客観主義」を問題にしている。日本資本主義の強靱さを強調しながら、なお革命が実現するとし

たら、それは決定論ではないか。「歴史の必然」を強調すればするほど、個々人の意志は不要になってしまわないか。ここでも橋川の関心は、組織や過程における人間の主観や意志の意味に向けられていた。

このとき橋川が注目するのは、「革命」と芸術の関係についてだった。

未完の芸術というものはない。それはつねにいかなる破壊の時代にも完成していなければならぬ。それはそのいみでは時代をこえる。それが革命的であればあるほど完成せるものであるということ——僕らが人間性を考える時、僕はそれを要求する。

歴史的必然ということが、つねにそれを破るモメントをもつということ——むしろそれが故に「革命」ということが問題になるということ。

その媒介者——人間。
必然認識は科学とよばれる。だからマルクシズムの場合、究極の概念は破滅（世界の）の概念と考えてよい。何故なら科学はそれを示すから。しかしここに絶対、科学の手で処理されないものが人間である。それは神、宗教、既成（？）文化の名前のもとに必然の反対物としてあらわれる。革命とは世界認識の方法である（その感情的・人間的実践）¹⁰。

芸術には「完成」が求められ、「それが革命的であればあるほど完成せるものである」と橋川はいう。つまり、そこに完結性という要素が要請されると考えるがゆえに、「破るモメント」としての「革命」につながるというのだ。橋川は芸術や歴史の「媒介者」としての「人間」が、その「意志」によって現実に終止符をうつ（区切る）ことの可能性を考えていた。よって「革命

とは世界認識の方法である（その感情的・人間的実践）」という考え方が記されたといえる。

この文脈で興味をひくのが二月一七日の記述である。橋川は一九四二年に制作されたフランス映画『泣きぬれた天使』の批評にたいする感想として「美」についての感想を記している。「映画『泣きぬれた天使』評。そこには合理主義があるという、その合理主義とは、センチメンタリズムを完全に排除する。美しさというものは抑制から生れるという考え方だ。感情について考える。それはたしかに抑制された時に美しい。抑制は何故美しいのか？ そもそも美とは何なのか？ それはとにかく完結せるものでなければならぬ。美とは、そこに立ちどまることを許すものだ」¹¹。橋川は映画評に「美しさというものは抑制から生れるという考え方」が示されていると受けとり、その考え方を肯定している。つまり「美」とは一般性から分離された「抑制」や「完結」によって構成された「そこに立ちどまることを許すもの」として橋川には考えられたのである。この記述はのちに「日本浪曼派批判序説」で「耽美的パトリオリズム」を論じたことを思い起こすとき興味深い。なぜなら橋川は「批判序説」において戦時下における美の機能を論じたのち、「美」が無差別の機能の化身であるならば、その追求をやめたほうがいい、と記したからである¹²。「批判序説」における「美」の分析につながる考え方が、この時期に確認できるのである。それは人間の「意志」を考える文脈によって形成された考え方だった。

三 個性とは何か

この時期、橋川は組織や全体に併呑されぬ自己形成の意味について執拗に思索をめぐらせている。二月一九日には、こう書いている。「多くの人々が（殊に小市民層）理論の欠如につ

いて苦しんでいるのではないか……資本主義のとどめる多くの残存物の中で、パトスナリ、テイが苦悶しているのだ」¹³。この「多くの人々」に橋川が入っていると解することに困難はすくない。年をまたいで期日はやや飛ぶが、一九五〇年二月五日、丸山からの指摘をふり返って、橋川は自分の性格について書いている。「偽善の泥沼の上で、ひとりよがりの理くつと正義感にいい気になっていた。足もとをみる、それがいやだからよりはげしく他人にバクハツする。外部につき当たる。そのため外に向かつて丸山さんのいう官僚的（ジェスチャ）をくりひろげる。何ものでもない網目のなかで片づける、内に入られることもつらい。いたい。だからいつか大きく自分をごまかして下う。最後には自分の悪をさえも口口されたものとして維持しようとする」¹⁴。

こうした丸山の指摘をうけて橋川は、この問題にたいする解を求める方向をこう規定した。二月一三日の記述である。

いろいろな去年からのことに集約された本質は、ユーモア
 Ⅱペーソスの欠亡ということにもなる。それはプラグマテ
 イズムの本質のようでもあり、もっとひろくはヨーロッパ
 のヒュマニズムの陽（^{プラス}）の面をあらわすものだろう。「……」

＊ ＊
 コミュニズムは偉大な客観主義Ⅱシニシズム（丸山）である
 という理解がある。これは何かしら正しいリカイのよう
 でもある¹⁵。

橋川はユーモアを考えながら、プラグマテイズムへ関心を向けている。つまり洒落つ気や、快活さ、そういった愉しみのような「陽」の感覚と日常経験の立場に「客観主義Ⅱシニシズム」を超える方向を求めている。

二月一四日の記述では、ふたたび丸山との対話が記されている。「深層心理学をのぞいてみることに、——及びプラグマテイズムを……」¹⁶。丸山さんが『公け』ということをいった。これは今考えると深いシニシズムの批判だ。人間がすべて公化するというのは機械化ということに他ならぬ。僕の素質に非常にそいつがあるということにほかならぬ。官僚的ということにもなるのだ。素質というのは、よわいということかも知れぬ。むきになるということ（それも思ふべんに）はたしかにそうであり、人間一般にそれはあると思う。それは人間の「ゾク性」であるかも知れぬ。——ユーモアという奴はつねにその反対物Ⅱブルリズムを前提とするわけだ¹⁷。橋川は人間への冷笑が「機械化」や「官僚的」になることを反省的に書き記し、その対極に「多元主義」の考え方が位置づくと考えた。よって「ユーモア」や「プラグマテイズム」の必要性を書いた。

そして、これとの対比においてマルクス主義が問題にされる。「マルキシズムも一つのものとしての体系でない立場からとらえられる時は、深刻なシニシズムを前提としなければならぬ」というのは、それが美しかるべきことだからであるという根源認識の上に猛烈な実践の体系としてあらわれるのでないならば、そこには知的要素はあまりないことになるからだ。つまり生命を幸福にするために、生命の不幸から出発するというのは、幸福でありえないという認識の中から、幸福を逆に創出するので、それは知的な中止を意志により行うことだから！（この点不文明）¹⁸。やや理解しにくい記述であるが、ここで橋川が疑問としているのは、マルクス主義が現実とは「不幸」であるという認識ゆえに「幸福」を創ろうとする思想であるならば、現実への懐疑や冷笑が根底にあることになるのではないか、ということである。「知的な中止を意志により行うこと」によって、現実にはないものを創ろうとする。そうでなければ「知的要素はあ

「まりない」ことになってしまふ。

こう理解するとき、二月二五日に書いた日本の思想情況にたいする批判的な言及も理解できる。「日本におけるストイシズム

コスモポリタニズム

……道徳のいみをも含めて——は世界認識を欠いているのが尤も問題だ。というのは、日本民族が例外となり、流出してエキゾチズムになつて了うからだ¹⁾。ここで橋川は「世界認識」の欠如によつてみずからが例外として位置づけられ、「エキゾチズム」になることを「日本におけるストイシズム」の特徴として批判している。この立場は、のちに橋川が著作活動を始めて以降、一貫して日本特殊論をしりぞけ、普遍性から日本社会を分析することの必要を説いていたことを考えると興味深い。つまり、現実や普遍性のなかに「私」がふくまれていなければならぬという立場が持続され、具現化されていった過程として考えられるからである。みずからを例外として排除するのではなく、自分をふくむ「世界認識」の確立の必要を、橋川はこのときすでに自覚していた。

この問題の探求はさらにつづく。「僕は長い間、『意志』という奴がどうして生れるのかわからなかつた。それを僕は向上への意志という風に日本の少年らしい考え方をしてきたようだ。だからそこには、官僚主義的相対主義位しかなかつたし、自分が意志をもつということはむいみに思われたのだ。そこから一切の僕の非人間化が始まつている。／今僕は思う、意志とは認識に外ならぬということと、自己の頭脳で認識すること、それが意志の□□なのだ¹⁾。これまで橋川が思索してきた「意志と何か」という疑問に、「意志とは認識に外ならぬということ」と答えをだしている。立身出世のような「向上への意志」ではなく、みずからが対象をどのように「認識」するかということにこそ「意志」の意味があると橋川は考えていった。

橋川は自分の認識を試すように、習慣について記してもいる。三月一二日の記述である。「つまらぬくせで身を亡ぼす人間が少なくない、という箴言——深く悲劇的な考察である。／どうしてやめられないか、ということから『習慣論』をよんでいるが、徹底的に認識したらできないわけはあるまいと思う²⁾。橋川が読んだのはフェリックス・ラヴェツソン『習慣論』である。橋川の関心は自己を「認識」することの可能性にあったのだろう。習慣の認識という観点から、ふたたびマルクス主義の問題について考えている。

習慣が自然の自己発見の一つであること、と要約してもいいであろう。より高きもの——自由の中に自己は自らをあかしする、そして自由はそれが自己であることを幸福として感ずるであろう。

自然べん証法における Grace or Love の分析、マルキシズムはほぼ明かにギリシャ・ラテンの哲学の中に包まれることがわかつた。そこに憎悪の心があるということとは、マルキシズムの根本的認識ではないはずである。階級敵、闘争、憎悪、プロレタリアートという連鎖は、マルキシズムの中にかかれた Grace の特質な——恐らくは政治的な、或は Grace としてのシニシズム(?)の——あらわれにほかなるまい。例えば人間は悪いものであるからという一つのひゆの上へのみ展開された如き……。

自然と人類以外のいかなるところからも、マルキシズムが生まれるものではないことを明らかにせよ²⁾。

橋川は「認識としての意志」を考えた結果、「習慣が自然の自己発見の一つである」との考えに到つたのである。そしてマルクス主義の「根本的認識」に「憎悪」がふくまれていたわけではなく、「一つのひゆの上へのみ展開された如き」ものとして考へるに及んだのである。三月一四日には、「人間の性悪説」プロブレマティシユということ。／丸山さんにいわせると僕も詩人

なんだそうだ」²²とも書いています。

そうして橋川は習慣をみつめながら人間にとっての「悪」を考えはじめた。翌日の三月一五日には、「憎悪」についてのメモを記している。

憎悪について……それが何に指向されるかが問題だ。「不正と暴虐に対する憎悪なしには、真の愛情もありえない」（クラハラ、三、一五「ハタ」）これは正しい。しかし問題はそれが容易に人間性の弱みにくい入ってくることであり、容易に機械化された憎悪となることだ。

ここでも徹底した知覚——認識が必要である。戦後論の重大性は、それが人間性のすべてにかかるからである。何ものを憎むか？ それの問題であり、怒りという人間性の□□□□□□□□感情が高められたものであるためには、その根底に徹底した理論が必要となってくる。それがなければダメなのだ²³。

この日の記述は、蔵原惟人「一九二八年三月十五日」〔『アカハタ』一九五〇年三月一五日〕の感想である。蔵原は戦前の共産党弾圧事件である三・一五事件をふり返り、この文章の最後に橋川が抜き書きした部分を書いたのだった。橋川はこの蔵原の主張を認めながらも、「機械化された憎悪となる」ことの問題性を考えている。すでに見た二月一三日や一四日の記述を思い起こせば、橋川の警戒感「シニシズム」であるといえよう。つまり機械的でない、個人の内から生みだされた「憎悪」たりえているかを問題にしていたのである。

橋川は「重い心をもって軽く生きねばならぬ、意志と認識の明るさが心の重さをかるがると担うようになるまで」や、「虚飾なくして、しかも節度を失わぬことはむづかしい、それは真に自他の尊貴を知るもののみのできることである」²⁴。といったフレーズを記しながら、自分の「意志」||「認識」を絶えず確

認している。

五月五日には、ゲーテの箴言集をよんで考えたこととして次のように書いている。「人間的競争心ということはいいことだ。それがひくつやごうまんにならぬ限り……不幸であっても幸福でもあつてもならない。自然に……幸福ということ……僕は幸福を希わず、しかも自他にそれを自覚させることができるように生きればよい。問題は勇敢であるか臆病であるかにかかっている。不幸ではないようだ。スピノザの淨福——それはすでに普通の幸福を考えている」²⁵。橋川における「認識としての意志」への関心は、「問題は勇敢であるか臆病であるかにかかっている」と展開されるのであった。

橋川は「悪」という観点から、人間という一般的な存在と、個という具体的存在を考えながら、その重層性について思考をめぐらしている。

恐らくは人類社会が無限の多様性（悪）をもって存在するのみならず、個人もまた必然的に一この混沌としたミクロコスモスであるのであろう。そこには一切の調和が喪失し、一切の悪が支配しているのであろう。この恐るべきブルリテートの大渦中であつて、人間は全く「考える葦」にほかならず、亡びに近い存在であるにすぎないだろう。絶対とハルモニアは影をひそめている。ヘテスの調和も世の神々も近代の絶対精神もことごとく今忘れさるべき運命をもっているかのようなのである。

* * *

調和・愛・カリス……を創出するものは結局「個」である。個は人類よりも深く運命の錐につきさされる。その中に無限と愛もひらめく。「個」の中に運命のエネルギーが集約される。何故なら意識し考えるものはまず「個体」であるからである。物質は個ではない、それは一つ「死」の静安であり、それ自身永遠なるものである。「個」は自ら決し

て永遠であることを考えない、ここに「人間」の原罪がある。それは最初の生の□□□である。

「文化」はこのような個の存在悪から生み出される。それは集積されて偉大な悲劇の反映を宇宙になげる、それは亡ぶべき「個」の祈願のようなものである。²⁶

人類社会の「無限の多様性」という別次元において、個人も「ミクロコスモス」である。ただし、そこでも「意識し考えるものはまず『個体』である」とし、「永遠であることを考えない」有限であることに「『人間』の原罪」を見るのだった。

そうして自分の認識を確認しながら、さらに断章を書きつけている。「ありのままにみる、ことが大切だ、それはありのままに感ずることになるだろう」²⁷。「自分と他人とは全く何のこともなく平常に同じ人間であること、自分が自分の妄念をなだめながらどこまでも素朴でいること……むつかしい」²⁸。橋川は自分を見つめ、他人を考え、「人間的」であることを求めていた。さらに翌日にも、「断じて人間的であれ！／人が僕を見るように自分の運命をえらぶか？ 自分が自分を見るように自己の運命をえらぶか？ ムロン後者であり、そして初めて前者に通ずる」²⁹と書いている。

このような思索をつづけてきた橋川は、一年のまとめとして以下のように総括した。「この一年のいろいろなこと、Mには書いたが、1、Coninform 批判、2、潮流社解散、3、法政、弘文堂就職、4、弟の重態、5、母の死、6、Sとの訣別、7、fを知ったこと、8、魯迅全集、プラグマティズム、エンピリシズムに対する再評価、9、Mとの交友、それにレッドページ、読書会の結成、etc.、かなり多忙な年ではあった。いずれも僕の骨肉の内にしみこんだものとして、将来にわたって僕の要素を形成してゆくだろう」³⁰。この記述からは、橋川自身が「プラ

グマティズム、エンピリシズム」に影響を受けていたことが理解できる。

四 歴史とは何か

年が変わって一月二〇日に橋川は、ロベルト・ロッセリーニ監督の『無防備都市』を見た感想を記している。「シネマ・パレスで『無防備都市』を見る。抵抗ということの全人間的意味及び……ファシズムの凶暴さが描かれる時何故唯コツケイなものにしかならぬか」³¹。橋川は「全人間的」な行動の歴史の逆説について思いおよんだのだろう。翌日にも『無防備都市』についての感想を記したうえで、そこから人間の歴史について関心を向けている。

古典叙事詩が読みたい気がしきりにする。といつてもイリアスやアエネアス、神曲、ファウスト、シェークスピアの何か、それにエスキュロスの悲劇、何でもいいのだが、人間と運命の偉大さを格調を以て歌ったもの……恐らく歴史は、今の時代を無限に華麗或は峻厳な人類史の一時期として示すであろう。地球上の山脈と海洋に刻みつけられた人類の運命、その強調が、後世の歴史のモチーフになるだろう。歴史は現代において殆ど解体したかと思われるほどに、一つの extreme な情況の中で、「一切」を expose している。個々のきれぎれの些少な、紛乱した現象が、完全に意味を失って見える反面、それ故にこそ、それらが無限の内容をもつと思われる倒錯した瞬間が、かくも精しく生命の軌道をかき乱すのは、恐らくは歴史がその逃避を、それらの中に激しく求めているからではないか？

かくもきびしく歴史とその法則が自らを主張し、かつて美しく歌われたことのある一切の人間性が内がわから追いつめられ、死滅しつつある時代に、かくも切実に生命を

希み、その中に含まれるすべてを奪取しようとする些細な個人の不安Ⅱ期待が、より一層痛切であるような時代とは、一体どういうエツポクなのか？³²

後半部分は詩的な表現で解釈が難しいが、以下のように理解できる。橋川は「人間と運命の偉大さ」に思いを至らし、歴史を考え、同時代を見ている。「歴史は現代において殆ど解体したかと思われるほどに」一つの極限において、全てを暴露している。無数の断片的な現象が意味を有しがたく、しかし、それゆえ「無限の内容をもつと思われる倒錯」を生みだし個の統一感を奪うのは、歴史がその情況に逃げ込んでいいるからではないか。つまり歴史の解体的現象は、かえって「歴史とその法則が自らを主張し」ているからではないか。そのなかで「私」らしくあるろうとする「些細な個人の不安Ⅱ期待が、より一層痛切であるような時代とは、一体どういうエツポクなのか？」。そうした諸現象を一つの「時代」として理解するとはどういうことかを橋川は考えていた。これまで橋川が「認識としての意志」を考え、人間を考えてきた問題が、『無防備都市』という映画を媒介に、ふたたび歴史の問題へと接続したのである。二月三日に橋川は、あらためてこう記している。「人間的ということ——今や大変なことである、愛すべきものを愛し、求むべきものを求める。本来人間的とは、高貴ということではなければならぬ」³³。

この日以降、日記からは徐々に自己分析的な記述が少なくなると、日録と読了した書名で埋めつくされていく。とりわけ六月二四日に、「二二日黒保健所にて検診、両肺疾患ある由」³⁴と書いて以降は、日録という性格がよくなり、思索が記されることは減っている。かなりの速度での濫読であるため、そこに何らかの一貫性を見いだすことは難しいが、歴史への関心をもちながら読書をすすめていることが注目される。断片的な記述になつてしまいが、橋川の関心がよく見える部分をとりあげて

みたい。

八月一六日に、ホップスとマイネツケを読んだときの印象をこう書きとめた。「レヴァイアサン」よみ始める。マイネツケ「歴史主義の立場」よむ。歴史主義ありし日のよき歌！ロマン主義、前期ロマン主義の系譜、手工業時代、リッタートゥムへの回想、神秘的観照主義——時代の解体に抗して、古典フマニスムへの回帰、ドイツ帝国の俗物主義に抗して、並びに世界経済の単一化に抗して、ドイツ的ゲミュートへの復帰。英仏で哲学的合理主義の果たした役割を□□□適用しえないドイツの「反応」³⁵。歴史主義の特徴をロマン主義の系譜において問題にしながら、「ドイツ的ゲミュートへの復帰」という観点でとらえている。

一週間後の八月二三日にはこう記している。「プレハノフ」史的唯物論。一八世紀の思想・科学からロマン派経済学へ——これを研究すること。政治学史が科学として成立する根拠を明らかにすること。芸術的構成の妥当性と限界を批判的に明かにすること。ブリュメール十八日」とスタンダール「ナポレオン」との対比、方法論の問題として」³⁶。橋川の関心は、人間を対象にする政治学が科学として成立することと、一方で「芸術的構成の妥当性と限界」を見極めることに向けられているのがわかる。つまり、ここでも主観性と客観性にその関心が向けられているのである。

翌々日には森鷗外の作品について感想を残している。「昨夜鷗外選集よむ。／「即興詩人」への回憶。／「阿部一族」残虐無比なことながら文字どおり淡々と書かれている。解釈めく文字しかないことがその作品の筋金となっている。そしてそこに殉死を支える不思議な社会の現実が個々の個性を美事なリーフとともにえがかれている。「雁」これも淡々としている」³⁷。「淡々としている」と「個々の個性」の併存を鷗外の作品の特徴ととらえている。

次の日には、小林秀雄の歴史観について対照的な感想を記している。「小林の『無情といふこと』にある歴史の観念、モラリスト風の観念としては美事だろうが、死んで固定したものにしておかねばならないだろう。生きている側からの働きかけはそのまま凍って了うだろう。生存ということの内容が失われて了うだろう」³⁸。「死んで固定したもの」ではない「歴史の観念」とはいかに可能か。「自然法と自然法則の区別、発生の哲学、分岐、デカルト、ガリレイ、ホッブス、自然哲学と自然科学、の二つの観念」³⁹。こうした問いをいだきながら、橋川は九月二十八日に中野療養所に入院した。

おわりに

一九五〇年前後になつても、橋川には戦争体験が影のようにまとわりついていた。『わだつみの声』の感想として記した「野戦の状態」という言葉には、戦争の影を引きずっていることが典型的に示されている。橋川は著作を発表するようになってから、戦後の精神的な構えが「野戦攻城」だったと発言したことがある⁴⁰。その精神的態度が鮮明に示されているのが「日記」の特徴である。

読書での思想形成という側面では、マルクス主義関連の文献を読みあさりながら、その問題点をさぐっているところに特徴がある。高見順の「人間II生を一つのプロセスとして（一つの目的への）のみみること」の誤りを書き記し、「転向」の問題系と自分の問題関心を交叉させていった。そうして「全体と個」の問題系を考える過程で、「美しさというものは抑制から生れる」、「美とは、そこに立ちどまることを許すものだ」と記した。こうした考え方は、普遍性のなかに自分の主観がどのように位置づくのか、という関心から書かれたものだったことが注目される。

また、一九五〇年はコミンフォルム批判により日本共産党が「所感派」と「国際派」に分裂するなど、マルクス主義のあり方が動揺した時期でもあった。こうした情勢のなかで橋川は実践活動に参加していたのだが、自身の性格がマルクス主義に親和的でなかったこともあいまつて、個人における主観の問題に関心を寄せていた。それは客観主義や宿命論にたいする疑問として表出され、「意志」が問題にされたのだった。橋川の答えは、みずからが対象をどのように「認識」するかということこそ「意志」の意味があるという考えだった。つまり「認識としての意志」のあり方を考えていたのだった。

こうした考え方が形成された要因には、丸山眞男からの指摘と、それを通じて自分の性格を反省的に分析していったことがあげられる。丸山からの指摘をうけ、たびたび自分の性格の特徴である「性急さ」を批判的に分析し、その対極を模索した。そのさい橋川においてユーモアやプラグマティズム、エンピリシズムへの評価が高いことが注目される。また「人間の性悪説IIプロブレマティシユ」という観点は、橋川が政治を論じるさいの基底的な視座であり、この時点で示されていたことは、その思想形成を考えるうえで重要である。橋川は個人性を考えていく過程で、「悪」や人間の「問題性」に直面したのだった。

こうした過程について、橋川がその後の著作活動でも持続させた態度として、三点指摘しておきたい。(1)「美」への関心。(2)「私」をふくむ普遍性の探求。(3)「悪」、「人間の問題性」への関心である。(1)については「日本浪漫派批判序説」以降、執拗に「美」を問題にしていたが、その関心に通じる要素が日記には確認できる。また(2)に関連することでは、橋川は超国家主義論などでもそうであったが、日本社会や戦中の諸思想について、普遍性から分析する必要を説いていた。また、そこで基底におかれたのが、「悪」や「人間の問題性」といった考え方であった。このように、その後に著作として展開される論

点への自覚をこの時期に求めることができる。そしてこれらの問題について歴史を考えることで答えを見いだそうと模索していたことも、その後の橋川の著作活動を理解するうえで重要である。つまり橋川のさまざまな著作は、この時期における実践活動での悪戦苦闘にともなう自己意識の解体・再編をとおして獲得された経験に裏うちされた議論だった。

以上のように、その後の著作で展開されることになる基礎的な論点をいだいて、橋川は入院することになった。こうした問題について入院中、戦中に自身が「いかれた」日本浪漫派を通して考えることで、五〇年代後半以降からの論壇での議論が開されたのである。

註

- 1 井上光晴「橋川文三の『日記』について」(『辺境』影書房、一九九九年)。
なお本稿では『辺境』編集部が補った(何字不明)を口置き換え(「……」は報告者が略したことを示す。また引用文中の傍点は、すべて原文による)。
- 2 鶴見俊輔「橋川文三の思い出」(『思想の科学』一九八四年二月号)。
- 3 橋川文三「橋川日記一九四九・一九五一」一九四九年一月七日(『辺境』影書房、一九九九年)。
- 4 同右、一月一日。
- 5 同右、一月三日。
- 6 同右、一月四日。
- 7 同右、一月八日。
- 8 同右、一月九日。
- 9 同右、一月九日。
- 10 同右、一月二二日。
- 11 同右、一月二五日。
- 12 同右、一月二五日。
- 13 拙稿「橋川文三『日本浪漫派批判序説』の発想と論理」(『駿台史学』一六一号、二〇一七年九月)。
- 14 前掲「橋川日記一九四九・一九五一」一九五一年一月十九日。
- 15 同右、一九五〇年二月五日。
- 16 同右、二月一三日。
- 17 同右、二月一四日。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|--------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 4 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 |
| 0 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 代 | 橋川文三・鶴見俊輔対話集 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 1 | 合同出版、一九七一年 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 2 | 六二頁 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 3 | 橋川の発言 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 4 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 5 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 6 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 7 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 8 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 9 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 10 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 11 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 12 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 13 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 14 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 15 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 16 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |
| 17 | | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 | 同右 |